

巻頭言

今年をふりかえって

惣 津 律 士

あらゆる農業問題の解決に畜産の振興が年と共に強調されるようになった。

農業経営をよりよく向上せしめるためには何はさておき、畜産を基幹とせざるを得ない現状はうれしい事であるが、今まであまりに封建性の強かった畜産界だけに、その脱皮には容易ならざる苦勞が伴い、種畜の改良はもとより、家畜及び畜産物の取引、さては飼料についてもはっきり現われて、関係者がその対策に日夜苦悩している。

だれしもこうやった方がよいんだと心の中に思い乍ら、ぬけ切れない所に問題がある。

日本農業がまだまだ保護政策の上に生きなければならぬようなことは実にはかなしいことであるが、反面自主的に限りない努力がたくましくつづけられている事例をまざまざ見せられることは愉快だ。即ち従来等閑視されていた経営の分せきや牧野の改良が積極的に講ぜられるようになって来た。又共進会を見ても年々改良の跡がめざましく、共同出荷も協同意識の高揚によって改善工夫がなされつつある。

家畜の導入が盛んに行われ、表面上はいかにも畜産が振興しているように見受けられ易いが、畜産関係者の積極的な熱意と協力で解決しなければならない問題が多々あるのを看過出来ない。試みに肉の問題を取り上げて、屠場、冷蔵庫が依然として施設が古く、非能率であったり、肥育牛の出荷と受入側の体制がまちまちであったりする事は寒心にたえないものがある。又技術水準にしても、試験研究の成果の普及、受入れにしても問題がすっきりしない。又有畜農家が自分の農場経営について熟練した技術をもち、よき経営

者であると共によきビジネスマンであるかどうかとも真剣に考えさせられることである。

畜産が農業の中に大きく取り上げられることそのことが、明かに新しい時代への解答であるけれども、私達畜産関係者は更に進んで、畜産そのものの科学水準を高め、施設の近代化を図る必要のあることを痛感するものである。1年の流れは早い、今年は今とての特色と発展があったはずである。お互にもっともっと勉強したいものである。